

2024年春闘アピール

いっそうの賃上げ 傷む賃金を正し、苦しさ増す生活を直すとともに確信をもってたたかう 2024年春闘

組合員のみなさん

1月1日に発生した「能登半島地震」は、石川県を中心に日本海沿岸の市町村に甚大な被害をもたらし、ライフラインが停止するなか、被災地では厳しい状況が続いています。この災害の痛ましい犠牲となった方々に謹んで哀悼の意を表するとともに、被災者のみなさまに心からお見舞い申し上げます。同時に、被災者のみなさまが一日も早く生活の困難と不安から解放され、安心して暮らせる日がくることを願ってやみません。

さて日本では、企業申告所得が過去最高を記録するなど、大企業を中心に経常利益は増え続けています。一方で、歴史的な物価高は続き、昨春闘における賃上げがあってもなお実質賃金は減り続け、個人消費は伸び悩んでいます。また、物価上昇を価格に転嫁しづらい中小零細企業の経営は圧迫されており、国民・労働者の不安は増えています。

こうしたなか岸田首相は、「デフレ完全脱却のチャンスをつかみ取るため」として昨春闘を上回る水準の賃上げを財界に対して求めています。これに対し経団連は、「昨年以上の意気込みと決意をもって賃金引上げの積極的な検討と実施」を会員企業に要請しています。

損保では、大手グループが通期決算で過去最高益を見込むなど業績は堅調となっていますが、様々な要因から事業環境の先行きは不透明さを増しており、各経営は、危機感や焦燥感をさらに強めています。そして、これを乗り切り将来に向けて、本業における収益を安定的に拡大し続けるための基盤づくりに躍起となり、さらなる「収益力の強化」と「生産性の向上」、「合理化・効率化」の動きを一層強めています。こうした「収益力の強化」すなわち「収益の拡大」をめざす、行き過ぎた姿勢が、顧客を置き去りとする、大手4社による『価格調整』やビッグモーター社による『保険金不正請求』にかかわる損保ジャパン経営の判断など一連の事態を生じさせ、業務改善命令が出されるなど、損保の社会的な信頼を失墜させることにもなっています。

こうしたなか迎える今春闘では、昨春闘にも増して各経営の危機感が強まるもとの、厳しい姿勢・出方となり、労使がせめぎ合う難しく厳しいたたかいとなることが想定されます。さらには、昨春闘同様に自らの都合や課題、政策を最優先として春闘交渉に持ち込み、職場に「春闘どころではない」とした意識を醸成し、機関と職場を分断する動きに出てくることも想定しておく必要があります。

一方職場では、各経営の危機感や焦燥感が歪みや犠牲となって転嫁され、労働生産性を追求する動きも強まり、「働く者の生活と雇用、労働条件」に対するリスクが現実のものとなり、「働き方改革」ともあいまって、その被害は大きくなっています。その結果、補償機能という社会的役割を損ない、損保に働く者の誇りと働きがい奪うことにもなっています。また、物価高にもよってその生活はますます苦しさを増しています。生活と労働条件に関するアンケートでは、産業と職場、生活と処遇、将来、そして「働き方」と「賃金」などに対し「何とかしてほしい」という大変切実な実態、非常に強い思いや声、広がる不満や不安とともに、「賃上げ”をはじめとする要求と期待も一層強まっています。

組合員のみなさん

全損保は、常に組合員一人ひとりの声と思いを大切にして、どのような困難な事態にも怯まず乗り越えてきたという、70年を超える歴史があります。この歴史のなかで培ってきた経験と教訓を土台に、2024年春闘は、傷み続けられている“賃金”、つまり労働力たる私たちの価値を正し守り、苦しさを増している生活を直し守るため、ひいては損保に働く者としての誇りと働きがいを守りとりもどすため、たたかう春闘です。

私たちは、

- 各支部・独立分会の課題とたたかいを全体で共有し、それぞれの理解と納得を大事に、全組合員の知恵と力を結集して、ともに全損保統一闘争をたたかいます。
- これまでの春闘の到達点に立ち、労働組合の力と可能性に確信をもち、共感を広げ主張と団結を力に、たたかいを職場から構築し、主体的にすすめます。
- とりまく情勢、経営の出方を冷静に見定め、直面する課題、もたらされる事態には真正面から向き合い、「生活と雇用、労働条件を守る」という不動のスタンスのもと、職場の現実と思いに寄り添い、そのときに最も求められる労働組合の役割を追求します。

全損保統一闘争のもと、いっそうの賃上げ、要求実現に向けて組合員の力を結集し、主張を束ねて団結を強め、確信をもって2024年春闘をとものにたたかっているようではありませんか。

2024年1月20日

全日本損害保険労働組合 支部独立分会代表者会議